フィールドノート

生活世界としての路上と市場

インド・コルカタから

澁谷俊樹 しぶや としき / AA研ジュニア・フェロー学

頑張った人が報われる社会が、いい社会なのだろうか？そうなると、頑張れない人や、あまり役に立てない人は、行き場を失うことはないだろうか？　コルカタの路上と市場の人間関係から考えてみよう

コルカタの中心街エスプラネードの風景。

孤立化と罪の意識

2016年7月、知的障害者福祉施設津久井やまゆり園で、19人の入居者が刺殺され、26人が重軽傷を負う事件が起きた。植松容疑者が、障害者は「社会の役にたたない」と示唆していたことにショックを受けた。その後メディアやSNSサイトで「障害」をめぐる議論が起こった。仕事のできる、感動を与える障害者が強調されることもあった。それなら、仕事のできない、感動を与えられない障害者はどうなるという疑問の声も聞かれた。あの事件は、「障害者」の議論に留まるものでもない。というのも、「有能な障害者」と「無能な健常者」なら、あなたはどちらと一緒に働きたいと思うだろうか？

ようやく非常勤講師にありついた私自身、自分が「役立たずの穀潰し」ではないかとよく悩む。正社員として働き、妻子もいる人が年下にもいる。彼らと比べられることを恐れて引きこもることがよくあるが、人並みの苦労を避けようとしていることへの罪の意識が、やがて私を外へと駆り出す。私が専門にする文化人類学は、コミュニケーションの学問ともいわれる。でも私はそれがあまり得意でない。お酒はコミュニケーションや出世の要だが、職の不安定なまま手を出せば、溺れて今より堕落するという恐れが拭えない。

結局、1月に1度でも直に会って何気ない会話ができる同世代の知人がいない生活が何年も続いている。合わせる顔のない人が徐々に増え、あと一歩が近いようで遠くなり、孤立化する。経緯はそれぞれでも、この悩みは、私だけのものではないだろう。

路上の縁

その私が、インド滞在中はやけに知人の多い生活を送っている。ベンガルの大都市コルカタには、路上で世間話をする文化がある。日が暮れると、チャイ屋などの露店の周りで、2時間も3時間も談笑する人々が出てくる。この世間話には、他人の迷惑への配慮を優先するような先進諸国の喫茶店や公共の場で共有されつつあるマナーはない。世間話をきっかけに自宅での食事や宿泊に招いてくれる人がいるので、私はこれを地縁ならぬ路縁（ろえん）と呼んでいる。路上にあり、チャイは一杯10円ほどと安く、外国人はもちろん、貧しい人からカーストや宗教も異なると思しきよその人まで、地縁よりもずっと開かれた縁だ。親密な人間関係が嫌という人もいようが、路縁に参加義務はない。

ベンガルにはこの文化があるので、行く先々で多くの知人ができて、他愛もない会話をする機会に恵まれる。私が一目見て外国人だからという面もあることは忘れないようにしているし、たまに嫌なこともあるけれど、母国では他人と口を交わさず数週間、なんてこともままある自分が、まるで嘘みたいに思える。

都市化が進むと、人口密度の高さとは相反するように、人間関係は疎遠になるといわれる。コルカタは、そうした都市とは少し違うのだ。

夜のチャイ屋の風景。多くの人が世間話をしている。

コルカタの路上は人が行き交うだけの場所ではなく水を汲み、歯を磨き、水浴びする場所でもある。

路上は遊びの場でもある。指で弾くビリヤードのようなゲーム「キャロムボード」。

市場の労働と生活

「インドのスラム」と聞いてどんなイメージをするだろう？ある時、コルカタのスラムの市場に住み込み、朝から晩までお喋りしたり、子供と遊びながら市場の仕事の様子を見ていて気がついたことがある。①1日8時間も働く人はそう多くないこと、②あまり働かない人や、仕事の下手な同僚への非難が少ないことだ。本当か？と疑う人もいようが、なぜかを考えてみたい。

市場の魚売り。早朝仕入れた鮮魚をその場でさばいてくれる。

正午過ぎの魚肉市場の様子。昼休みの文化があるので閑散とする。

朝の市場のチャイ屋さん。チャイは1杯3ルピーから。ビスケットは1ルピーから。

夕方にさしかかる市場。朝だけは野菜市場だが、午後からは広場になり、トランプやスポーツや世間話が始まる。

子供が子供の面倒を見るので、成人する頃には子供をあやし慣れている。

確かにインドでは、娘の多い家は大変だ。結婚したら花嫁の家が花婿の家に多額の持参金を渡す習慣が普及してしまったので、市場でも、娘の多い家は総出で働いていることがある。かと思えば、数ヶ月働いては数週間仕事をしなくなる人もいる。午前中4、5時間だけ働いて、専業主婦を養い、3人の息子娘を皆中学以上まで卒業させ、たまに数週間の家族旅行に出かける人もいる。この一家の1月の出費は約Rs3000（Rs1≒1.75円）だという。

①長時間働く人が少ない要因の1つは、「市場の家賃の安さ」だ。ほぼ全住民が借家暮らしで、家賃は高い家でも1月Rs200（350円）だという。野菜売りなら1日Rs300-500、魚や鶏の肉売りならRs400-600が手元に残るという。1日働くと1月の家賃を稼げてしまう計算になる。そんな仕事や借家が、あなたの周りにどれくらいあるだろうか？

もう1つの要因である「自営業という労働形態」は、②仕事が下手な人への非難が少ない理由でもある。市場で働く人の多くは、商品の仕入れも販売も自分、つまりアルバイトもいない自営業だ。組合に2万～10万ルピーを払って売り場を買い、以後毎月Rs30を組合に納めて店を切り盛りする。これがなぜ、あまり仕事をしない人への非難が減る理由になるのか？アルバイトや会社勤めと比べてほしい。市場のような自営業では、「組織の足を引っ張る」ことが難しいのだ。短時間しか働かず、突然店を閉めて旅行に出ても、困る同僚はいない。仲間や客との「コミュニケーション能力」は必須に思えるかもしれない。けれど、彼らはよく交渉相手を冷やかすし、無理なクレームに対抗できる。文化の違いもあるが、そもそも「雇われの身」でない彼らを解雇できる上司がいないのだから。組合は彼らに売り場を貸しているが、雇っているわけではない。物価の急な変動に弱いという難点もあるが、もし市場がスーパーマーケットになって、彼らが従業員になったら、全員に仕事があるだろうか？

彼らの多くには家族がいるから、あまり仕事をサボれば家族喧嘩になる。暇を持て余して他の店主に腐った玉ねぎを投げるなどの悪戯を始め、喧嘩になることもある。昼寝する習慣があるので、正午から夕方まで市場の売り場は閑散とする。午前中だけ働いて、夕方からは仕事以外の時間を過ごす人も多い。手足が不自由な人や、病気を抱えた人も働いている。新聞を読んでいる人は滅多にいない。暗算ができても識字ができない人が大勢いる。文盲でも、私より記憶力が良く、頭の回転の速い人がゴロゴロいる。

人と社会の関わりを考える

市場も会社も小さな社会といえる。その性質を大きく捉えれば、①所属する人の生活を優先する社会、②組織の存続や発展に貢献する人が報われる社会、という2つに大別できる。コルカタの路上や市場は①に近いだろう。市場のような自営業の社会では、スーパーマーケットのような賃労働の社会に比べて、「仕事の下手な同僚」や「役立たずな自分」に苛立つことは少ない。「役に立たない人は必要ない」という植松容疑者の思考を強化したのは、②の社会観ではないかと思う。それは、組織の存続に資さない個人の所属や生存を認めない社会とも換言できる。問題は、そのような社会自体にもあるかもしれないが、そのような社会のほかに居場所を求められない状況にあるのではないだろうか。

生活世界としての路上や市場は世界中にある。ここに記したのはコルカタの一部の地域の話にすぎない。インドには農民の自殺の問題もある。都市の市場の活況が農村の疲弊と連動している可能性もあろう。私は自分では、調査の途中に偶然気がついたことを書いた気になっているが、日本での社会生活がうまく行っていないからこそ、青く見える隣の芝生を羨んで、母国への恨みを呟いているだけかもしれない。異文化のよく見える所だけを持ち込み、再現したいと夢見るのは浅はかである。

そのうえで私は、コルカタの路上と市場には、先進諸国がこれまで辿り、またこれから辿るであろう社会とは異なる未来の社会の姿が含まれていると信じている。そしてその姿は、コルカタの生活の延長にあるだけではなく、私たちがそれぞれに抱く疎外感の根源に、眠り続けているのである。